

泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画「鏡花と能楽」展示報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28178

g. 「鏡花と能楽」 関連略年譜

- 1780 (安永9) 中田仙助、加賀藩江戸詰御手役者となる。【江戸】
- 1792 (寛政4) 仙助の父・中田千五左衛門(中田家初代・鏡花の高祖父)死去、仙助から改名した中田猪之助(中田家二代・鏡花の曾祖父)が家芸を引き継ぐ。
- 1811 (文化8) 2月、焼失した金沢城二の丸の造営成就ならびに十二代前田斉広の家督相続・入国祝賀の儀式能が新二の丸で行われる。後に藩政期における最大の盛事として知られる(文化の大規式能)であり、中田猪之助(二代)も大鼓方として江戸から随従し、出演する。【金沢】
- 1841 (天保12) 中田万三郎、父猪之助(二代)から家芸を引き継ぐ。【江戸】
- 1848 (弘化5) 宝生友于(十六世宗家・号紫雪)が江戸神田筋違橋門外で一世一代の勸進能を行い、中田万三郎も出演する。江戸時代最後の勸進能となる。【江戸】
- 1856 (安政3) 中田万三郎、猪之助(中田家三代・鏡花の祖父)と改名。【江戸】
- 1862 (文久2) 5月、前田斉泰と前田利鬯による演能。維新以前の金沢における最後の催能となる。この年、加賀藩は幕府の「格別之御改革」に遠慮し、翌年からの謡初の差し止めを宣言、藩の公式行事としての催能は維新後まで中止された。【金沢】
- 1863 (文久3) 7月、宝生紫雪、金沢で死去。全性寺に葬られる。【金沢】
- 1868 (慶応4) 1月、鳥羽伏見の戦い(戊辰戦争)。
4月、江戸居住の御手役者に藩から扶持・給金の続行を条件に御国居住を命が下る。【東京】
9月8日、明治に改元。
11月23日、前田慶寧、父斉泰とともに戊辰戦争からの加賀藩兵帰還を祝い金谷御殿で6年半ぶりに演能、江戸から一家で移住した中田猪之助(三代)・惣之助父子も出演する。【金沢】
- 1869 (明治2) 1月15日、巽御殿(後の成巽閣)で真龍院(前田斉広継室・斉泰継母)の長寿を祝い、舞囃子などが催され、中田猪之助・惣之助父子ら出演、後に「加賀藩の挽歌」と評される。【金沢】
4月1日、観音院の能に猪之助・惣之助父子出演。【金沢】
6月17日、諸藩版籍を奉還。これにより加賀・大聖寺・富山の各藩は廃され、前田慶寧は華族に列し、金沢藩知事となる。【金沢】
9月、松本金太郎(中田猪之助三男・松本彌八郎養子・鏡花の伯父)ら、徳川慶喜に従い静岡に移住。【東京】
同月、林寿三郎の今様能狂言が来沢、泉祐三郎とともに興行し、好評を得る。【金沢】
- 1870 (明治3) 中田猪之助(三代)が豊喜、惣之助が孫惣と改名。【金沢】
- 1871 (明治4) 2月、蓮池御庭を興楽園(後の兼六園)と改称。【金沢】
7月14日、廃藩置県(金沢県)。同15日、前田斉泰還暦祝賀能が催され、金沢城最後の催能となる。【金沢】
8月、前田斉泰・慶寧が東京へ移住。
この年から明治6年にかけて岩倉具視が欧米各国を視察、日本の能楽堂がオペラ堂に匹敵するものとする認識を持つ(久米邦武『米欧回覧実記』)。【東京】
この頃、中田豊喜の娘・鈴、加賀藩御細工人・和泉屋庄助の息子で加賀象楯の彫金師・泉清次に嫁す。【金沢】
- 1872 (明治5) 2月2日、金沢県を石川県と改称、県庁が美川へ移される(翌年、金沢に復帰)。【金沢】
3月3日、兼六園一般公開(4月15日まで)。【金沢】
この年、御手役者の扶持が差し止められる。
- 1873 (明治6) 11月4日、泉清次長男として鏡太郎(後の泉鏡花)誕生。【金沢】
11月16日、藩祖前田利家を祭祀する尾山神社が完成。【金沢】
- 1874 (明治7) 5月7日、兼六園が大蔵省の認可を受け公園に指定され、開放される。【金沢】
7月31日、兼六園内の旧竹沢御殿を西館、ドイツ人鉱山学講師デッケン旧居館を東館として勸業博物館創設。【金沢】
- 1875 (明治8) 11月25日、尾山神社神門が落成する。【金沢】

- 1876 (明治9) 4月1日、常設の金沢博物館(旧勸業博物館)が開館。【金沢】
4月4日、右大臣岩倉具視邸に明治天皇が行幸し能狂言を天覧、前田齊泰・利嚮・梅若実・宝生九郎らがシテを務める。【東京】
- 1877 (明治10) 2月15日、西南戦争勃発。
6月30日、第一回内国勸業博覧会小会が金沢博物館で開催される(7月8日まで)。
【金沢】
7月17日、中田孫惣(惣之助・鏡花伯父)死去。【金沢】
- 1878 (明治11) 1月11日、松本長(松本金太郎次男・鏡花従弟)誕生。【東京】
6月13日、金沢博物館が金沢勸業博物館と改称、能舞台が建設され、同16日、舞台開きが行われる。【金沢】
7月5日、青山御所(英照皇太后)に能舞台が建設され、舞台開きの能楽が催される。【東京】
9月20日、尾山神社の能舞台の舞台開きが行われ、演能に中田豊喜も出演する。
【金沢】
- 1879 (明治12) 7月、岩倉が米国前大統領グラントを自邸に招き、宝生九郎らの演能を催し饗応、維持保存すべきものとして評価される。【東京】
- 1881 (明治14) 1月10日、旧金沢城内に設置された名古屋鎮台管下第七連隊本部より失火、二の丸殿閣などが焼失。【金沢】
3月、芝公園内に能舞台(芝能楽堂)が竣工、能楽復興のシンボルとなる。【東京】
10月19日、中田豊喜死去。【金沢】
この年、前田齊泰が発起人となり、能楽の保護・復興を目的とする「能楽社」(東京)が発足、これ以後、能・狂言は「猿楽」の称を廃し、「能楽」の称を用いる。【東京】
- 1882 (明治15) 12月24日、泉鈴(鏡花生母)死去。【金沢】
- 1884 (明治17) 1月16日、前田齊泰死去。【東京】
- 1890 (明治23) 10月28日、泉鏡太郎、作家を志し上京。
この年、「能楽社」が「能楽堂」と改称される。【東京】
- 1891 (明治24) 10月11日、金沢開始300年祭が行われ(15日まで)、尾山神社において能楽の催しが、17日には石川県勸業博物館で能楽の催しが開催された。【金沢】
同月19日、泉鏡太郎、尾崎紅葉宅を訪れ門下生となり、鏡花の号を授けられる。
【東京】
- 1892 (明治25) 7月6日、鏡花、神田猿楽町の松本金太郎宅を訪問、金太郎(鏡花伯父)並びに中田さん(鏡花伯母)と対面する。【東京】
10月、鏡花の処女作「冠弥左衛門」が「日出新聞」(京都)に連載される。
11月10日、鏡花の生家が大家で焼失する。【金沢】
- 1893 (明治26) 5月、中田孫惣(鏡花伯父)十七回忌法要出席のため、中田さん来沢。【金沢】
6月、今様能狂言の泉祐三郎一座が博物館の招魂祭に出演。【金沢】
9月10日、石川県能楽会設立。【金沢】
- 1894 (明治27) 1月9日、再建された金沢下新町の自宅で鏡花の父清次死去。鏡花、急ぎ帰郷する。
8月1日、日清戦争勃発。
10月15日、泉祐三郎一座の今様能狂言が福助座で始まる。【金沢】
11月3日、日清戦争の「軍費義捐能」で宝生流の松本金太郎と波吉甚次郎(後、宮門襲名)が共演する。【東京】
- 1896 (明治29) 11月~12月、鏡花の小説「照葉狂言」が「読売新聞」に連載される。
この年、「能楽堂」が「能楽会」と改称される。【東京】
- 1900 (明治33) 12月1日、佐野吉之助が広坂・市役所並びの邸内に能舞台を建設、舞台開きを行う。【金沢】
- 1901 (明治34) 4月、横山隆平・北条時敬らを発起人として金沢能楽会設立。【金沢】
12月30日、鏡花、伯父松本金太郎とともに神奈川・静岡方面に年越しの旅に出かける。
- 1902 (明治35) 1月、鏡花、雑誌「新小説」特派員として名古屋へ出張、2月、伊勢神宮、古市、二見ヶ浦などを廻る。
- 1903 (明治36) 10月、鏡花の小説「風流線」が「国民新聞」に連載される。
- 1904 (明治37) 12月24日、松本金太郎次男・松本長が結婚、鏡花が媒酌を務める。【東京】
- 1909 (明治42) 夏、鏡花、知人の招きで桑名・伊勢に遊ぶ。

- 11月18日、文芸革新会関西地方講演会のため、後藤宙外・笹川臨風らとともに伊勢・桑名などに廻る。桑名では小説「歌行燈」の湊屋のモデル・船津屋に宿泊。
- 1910 (明治43) 1月、鏡花の小説「歌行燈」が「新小説」に掲載される。
- 1912 (明治45) 7月30日、大正に改元。
10月、紅葉山人十週年忌開催。松本長が「玉之段」(「海人」)を舞う。【東京】
- 1914 (大正3) 12月16日、松本金太郎死去。鏡花、「時事新報」死亡広告に下村観山とともに親戚総代として名を列ねる。【東京】
- 1915 (大正4) 4月、鏡花の小説「新通夜物語」が「文芸倶楽部」に掲載される。【東京】
- 1917 (大正6) 宝生宗家を継いだ宝生重英(18世)来沢し、佐野舞台で演能。この頃より宝生宗家と金沢能楽会の交流が活発化する。【金沢】
- 1926 (大正15) 11月、鏡花、金沢・尾山倶楽部出演のため来沢する花柳章太郎に同行して帰郷、26年ぶりに妹やゑと再会する。【金沢】
12月25日、昭和に改元。
- 1927 (昭和2) 4月、鏡花の小説「卵塔場の天女」が「改造」に掲載される。【東京】
- 1935 (昭和10) 11月28日、松本長(鏡花の従弟)が謡会で「国栖」を謡う中、脳溢血で倒れ、翌日死去。【東京】
- 1939 (昭和14) 9月7日、泉鏡花死去。【東京】

参考文献：『金沢の能楽』(昭47.6 北國新聞社)
『実録 石川県史』(平3.11 能登印刷)
『金沢能楽会百年の歩み』下(平13.3 金沢能楽会)
『大鼓役者の家と芸』(平17.10 飯嶋調寿会)
『新編 泉鏡花集』別巻二(平18.1 岩波書店)
他

(作成：穴倉玉日)